

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 10 日現在

機関番号：12605

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520286

研究課題名(和文) ウィリアム・バトラー・イエイツの超自然演劇における表象構造に関する研究

研究課題名(英文) Studies on the symbolic structure of the supernatural plays of William Butler Yeats

研究代表者

佐藤 容子 (SATO, YOKO)

東京農工大学・工学(系)研究科(研究院)・教授

研究者番号：30162499

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円、(間接経費) 450,000円

研究成果の概要(和文)：アイルランドの詩人・劇作家・神秘家であるウィリアム・バトラー・イエイツの超自然演劇における表象構造を以下の観点から多角的に分析した。すなわち、イエイツが体系的に用いる頭韻によるサウンド・シンボリズム、アイルランドのフォークロアと溶け合ったスピリチュアリズムの要素、さらに日本の能狂言との接触という観点である。劇作としては、イエイツのクフーリンサイクルの最後の作品となる『クフーリンの死』を取り上げて論じるとともに、『鷹の泉』と『猫と月』について、能「養老」及び狂言「不聞座頭」との比較を行った。

研究成果の概要(英文)：I have analyzed the symbolic structure of the supernatural plays of William Butler Yeats, an Irish poet, playwright and visionary from multi-dimensional perspectives: sound symbolism characterized by the systematic use of alliterations, spiritualism mingled with Irish folklore and the idea of the Japanese Noh and Kyogen. The Death of Cuchulain, Yeats's last play of the Cuchulain cycle, has been discussed from these perspectives. Also, At the Hawk's Well and The Cat and the Moon have been examined in comparison with a Noy play, Yoro anda a Kyogen play, Kikazu Zato.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学

キーワード：W. B. イエイツ サウンド・シンボリズム 能 スピリチュアリズム

1. 研究開始当初の背景

(1)本研究は、アイルランドの詩人・劇作家・神秘家であるウィリアム・バトラー・イエイツ (William Butler Yeats) の超自然演劇における複合的な表象構造を明らかにするものである。分析にあたっては、詩の語り、音楽、舞踏の三要素で構成されるイエイツの詩劇について、能及び狂言との接触、スピリチュアリズムと溶け合ったフォークロアとの関連、そして頭韻の技法という三つの観点から多角的にアプローチを行う。

(2)イエイツの詩的修辭的技法に関する先行研究としては、これまでにジョン・ストールワージー (Jon Stallworthy) による脚韻に関する研究がある。ストールワージーによれば、イエイツは詩のスタンザを書き始める前に脚韻構造を決定するのが常であった (Jon Stallworthy, *Between the Lines: Yeats's Poetry in the Making*, 1963)。

さらにマージョリ・パーロフ (Marjorie Perloff) は、イエイツの詩において脚韻と詩の「意味」の間には重要な関係性があると指摘した。パーロフは、イエイツの脚韻の型について、「調和」をねらったものと「不均衡」をねらったものの二種類に分け、さらに詳細な下位区分を行った。また、イエイツの重要な詩の一つ、「ビザンチウム」 ('Byzantium') の第4スタンザについて、脚韻はそれほど目立ってはおらず、/f/音、/p/音、/b/音による頭韻がみられることに気づいていた (Marjorie Perloff, *Rhyme and Meaning in The Poetry of Yeats*, 1970)。しかし、パーロフは、イエイツの作品における頭韻に関して、それ以上の考察を行ってはおらず、またそれ以降、イエイツの用いる頭韻について特別な言及を行っている研究はないように思われる。

(3)上記の先行研究を踏まえながら、私はイエイツの頭韻の用い方をさらに深く考察することはイエイツの創作技法の本質に迫るものと考え、これまでに「レダと白鳥」 ('Leda and the Swan') など、イエイツの循環的な歴史観・文明観が表現されているいくつかの重要な詩を分析し、さらに、軽妙な哲学詩ともいえるクレイジー・ジェイン詩群について考察した。その結果、イエイツは彼独特の神秘哲学体系と呼応させながら、詩のなかで/f/音と/b/音を極めて体系的に用いているという新しい知見を得るに至った (佐藤容子「'Leda and the Swan', 'The Mother of God', 'The Second Coming'にみる歴史の転換期と個人」2002; Yoko SATO "Crazy Jane as a poetic persona: Yeats's sound symbolism," 2004)。

イエイツが、彼の神秘哲学体系を表した著作『幻想録』 (*A Vision*) において、世界を「相互に咬みあいつつ離反しあう二つの円錐」と

いう幾何学的イメージで捉えたことはよく知られている。私は、イエイツの世界観の表現である「二つの円錐」を創出する「始原性の力」と「対抗性の力」は、彼の詩的テクストの「音素」のレベルにおいても作用していると考えられる。基本的には、イエイツにあっては、天上的なものを志向する「始原性の力」は/f/音で表出され、地上的なものを志向する「対抗性の力」は/b/音で表出されているのである。イエイツの用いる頭韻によるサウンド・シンボリズムは、イエイツの信ずる、大宇宙と小宇宙とが照応関係にある神秘的世界そのものの具現でもあるかのような詩的世界を構築していると言えよう。

しかしながら、重要なことは、イエイツにおいて頭韻として用いられる/b/音、/f/音の二音は、それぞれ「対抗性の力」、「始原性の力」と単純な対応関係にあるのではないという点である。この二音は対立しながら時に捻れていき、時に融合しながら葛藤そのものを表象していくのである。

このようなイエイツの世界観を反映する相互変換的な力学に裏打ちされた頭韻の用い方は、イエイツの詩作品のみならず劇作にまで及び、それが「スピリチュアリズム」や「能」との接触によって生み出されたイエイツ演劇の複合的な構造を支える重要な要素となっていると言える。

(4)以上の点について、私はこれまでに科学研究費補助金の交付を受け、イエイツの劇作を何篇が分析することによって明らかにしてきた。平成 17-18 年度の基盤研究 (C) においては、舞踏劇二編、晩年の劇作一編を分析した (Yoko SATO "The Only Jealousy of Emer: Yeats's dramatic art of symbolic representation," 2006; 佐藤容子「舞台表象からみる Calvary—イエイツの受難劇」2007; Yoko SATO "The Words Upon the Window-Pane: from spiritualism to 'Noh' to acoustic images," 2007)。

続いて平成 20-22 年度の基盤研究 (C) においても、イエイツの四編の舞踏劇のうちの残りの二編、及び晩年の劇作一編を分析した (Yoko SATO, *At the Hawk's Well: Yeats's Dramatic Art of Visions*, 2009; 佐藤容子「夢幻のジレンマ—The Dreaming of the Bones の表象構造」2010; Yoko SATO, *The Symbolic Structure of Yeats's Purgatory*, 2011)。

本研究は、これらの研究により得られた新しい知見をさらに発展させて、イエイツの劇作のなかでも超自然的な要素が強い劇作に対してもこのような観点の応用を試み、イエイツの超自然演劇の表象構造についてさらに深く分析を試みるものである。

2. 研究の目的

本研究においては、平成 17-18 年度及び平成 20-22 年度の基盤研究 (C) における一連の考察を発展的に補完することをめざす。イ

エイツの超自然演劇について、第一に、日本の能、さらに狂言との接触によってエイツが編み出した演劇構造がいかなるものであったかを論ずる。第二に、十九世紀後半から二十世紀初頭にかけて英国及びアメリカの知的風土に浸透したスピリチュアリズムを視野に入れながら、エイツの劇作においてはアイルランドのフォークロアとスピリチュアリズムが溶けあって劇の構成要素を形作っている点について考察する。第三に、エイツがその詩と劇作において体系的に用いる頭韻によるサウンド・シンボリズムに着目し、この技法がいかにエイツ劇のテーマと構造を支えているかを分析する。

具体的には、エイツのクフーリン劇の最後の作品である『クフーリンの死』(*The Death of Cuchulain*, 1939))を取り上げ、能、スピリチュアリズム、フォークロア、頭韻の技法の観点から分析を行う。また相互に関連性をもつ悲劇『鷹の泉』(*At the Hawk's Well*, 1917)と笑劇『猫と月』(*The Cat and the Moon*, 1926)について、それぞれの劇作の典拠とされる、能「養老」、また狂言「不聞座頭」と比較する。そのことにより、エイツ詩劇の表象構造の独創性を浮かび上がらせる共に、その構造を支える頭韻の技法を明らかにする。

3. 研究の方法

(1)本研究の方法論的な独創性は、エイツの超自然演劇の舞台表象について、エイツの用いている頭韻による体系的サウンド・シンボリズムに注目する点にある。新しく編纂されたエイツのテキスト及び刊行されている限りのマニュスクリプト版に基づきながらサウンド・シンボリズムに着目した綿密なテキスト分析を行い、エイツの手紙などの交友記録や R.F.フォスター (R.F. Forster) による伝記・講演録等を駆使する。具体的には、『クフーリンの死』及び『猫と月』においては、エイツの頭韻技法の基本となっている/b音と/f音がいかに用いられているかを考察する。あわせて、両極をなす/b音と/f音の中間領域に頻出し葛藤を表現することの多い/w音、/g音、/d音、/k音、/s音がいかに現れるかについても留意する。

(2)エイツのなかでスピリチュアリズムと溶け合ったアイルランドのフォークロアに繋がる構成要素について考察するにあたっては、『クフーリンの死』に関しては、まずエイツと同時代のエレノア・ハル (Eleanor Hull) の収集したクフーリン・サガ (*The Cuchulain Saga in Irish Literature*, 1902)を参照する。さらに、フォークロアの収集や演劇運動においてエイツと行動を共にしたグレゴリー夫人 (Lady Gregory) の著作にも光をあて、『ムイルヘヴナのクフーリン』 (*Cuchulain of Muirhemne*, 1902) に描かれているクフーリン伝説の記述とエイツ劇と

を比較検討する。グレゴリー夫人の再話をエイツは高く評価していた。『猫と月』については、『鷹の泉』とも比較しつつ、アイルランドの聖水伝説及びエイツ自身が語る近隣の聖なる泉についての記述に注目し、エイツの劇作との関連について考察する。

(3) エイツ劇と能及び狂言の関係については、能・狂言の翻訳を含むアーネスト・フェノロサ (Earnest Fenollosa) の遺稿を検討する。友人であり秘書でもあったアメリカの詩人エズラ・パウンド (Ezra Pound) は、アーネスト・フェノロサ (Earnest Fenollosa) の夫人より託された遺稿のなかから十五篇を選び、能の英訳を仕上げ、『能、すなわち完成』 (Noh, or Accomplishment, 1916) として刊行した。エイツはこれに先立ち、パウンドの許可を得て、このうちの四篇を『日本のさる高貴な劇』 (Certain Noble Plays of Japan, 1916) として序文を付して刊行するなど、能の英訳に深い関心を寄せた。『クフーリンの死』については、当初「能」として構想されながらも、直接典拠とする日本の能はみあたらない。しかし、エイツが、日本の「能」の形式を自らの演劇のなかに融合させて、独特の象徴演劇へと転換させていくさまが、この最晩年の劇作には伺える。そうした『クフーリンの死』の劇作法に焦点をあてる。

次に悲劇『鷹の泉』と笑劇『猫と月』を関連づけながら、『猫と月』の表象構造を分析する。これまでの研究においては、リチャード・テイラー (Richard Taylor) の研究書 (*The Drama of W.B. Yeats: Irish Myth and the Japanese Nô*, 1976) を始めとして、関根勝とクリストファー・マレーの共著書 (*Yeats and the Noh: A Comparative Study*, 1990) においても、『鷹の泉』の典拠のひとつとして、世阿弥作の能「養老」が挙げられてきた。「養老」の英訳は、フェノロサ遺稿に含まれていたが、パウンドは自らが編んだ『能、すなわち完成』には含めていない作品である。神能である「養老」とフェノロサの遺稿「養老」の英訳を相互に参照しながら、エイツの『鷹の泉』との相違点を浮かび上がらせる。

一方『猫と月』は、エイツが日本の「狂言」を念頭において作劇したと自ら述べており、『鷹の泉』や『骨の夢』を上演する幕間に演じることが意図されていた。その目的は悲劇の緊張を和らげることにあった。エイツは、『猫と月』を当初彼の舞踏劇集に入れることを考えていたが、最終的には、雰囲気異なると思え『踊り手のための四つの劇』に加えることはしなかった。

ただし、エイツはパウンドとは違い、日本の狂言に関心を抱いており、これまで『猫と月』に関しては狂言「不聞座頭」との関連が示唆されてきた。リチャード・テイラー (Richard Taylor) のエイツ劇に関する研究案内 (*A Reader's Guide to the Plays of W. B. Yeats*, 1984) ならびにアンドルー・パーキン

(Andrew Parkin)が編纂した『「鷹の泉」と「猫と月」』(At the Hawk's Well and the Cat and the Moon: Manuscript Materials, 2010)のマニユスクリプト版の解説には、「不聞座頭」への言及がみられる。しかしながら、これまでフェノロサ遺稿のなかに含まれていた「不聞座頭」の英訳草稿を駆使した研究はみあたらない。そこで、本研究においては、イエール大学図書館の中で、主として希少本を所蔵している Beinecke Library に収められているエズラ・パウンド・アーカイブの資料を調査する。そしてフェノロサ遺稿のノートに収められている「不聞座頭」の英訳を参照することによって、イエイツが実際に触れることのできた「不聞座頭」の英訳テキストを確認する。さらにその英訳を大蔵流・和泉流の「不聞座頭」のテキストとも比較検討しつつ、『猫と月』との関連性について考察する。

4. 研究成果

(1) 平成 23 年度においては、『クフーリンの死』を取り上げて分析した。『クフーリンの死』は、イエイツが死の直前まで手を入れていた劇作である。この劇作に関して著名な批評家の評価は分かれており、フランク・カーモード (Frank Kermode) は、『ロマン派のイメージ』(Romantic Image, 1957)において、イエイツの「おそらくはもっとも素晴らしい劇」であると述べた。一方、ヘレン・ベンドラー (Helen Vendler) は、『イエイツ「幻想録」と後期の劇』(Yeats's Vision and Later Plays, 1963)において、この劇作はクフーリン劇のなかで最も不連続で流れの悪い作品であると述べた。しかし近年の批評では、リチャード・アラン・ケイブ (Richard Allen Cave) が、イエイツ劇選集 (Selected Plays, 1997) において、この劇を革新性に満ちた独特のアイランド劇であると評価している。

本研究では、イエイツが以前『踊り手のための四つの劇』において編み出した「能」的形式を自在に変奏し、語り手と楽師たちによる枠組みを変化させて独特の円環構造を作り上げていることを明らかにした。一見不連続なエピソードの積み重ねと見えるものは、死期の迫った英雄クフーリンが自己の反対物である「ダイモン」と邂逅の劇化である。これは、『踊り手のための四つの劇』劇に収められているキリストの磔刑をテーマとした『カルヴァリーの丘』の劇構造に類似している。

『クフーリンの死』では、劇の始まりにおいて、クフーリンはエスナ (クフーリンの地上における恋人) と争いをし、年老いたイーファ (クフーリンの超自然世界における恋人) と再会し、盲人 (クフーリンの真の自己のパートナー) に殺されることになる。これらの出会いを舞台監督として司るのは劇の始めでは「老人」であるが、クフーリンの死後、老人は消えてしまい、代わりに戦いの女

神モリグーが舞台監督であるかのようにクフーリンの妻エマーの舞踏を準備する。

イエイツの『クフーリンの死』では、クフーリンが「盲人」に殺されたあとで「鳥」に変容するかのような暗示があるが、この結末はエレノア・ハルが編纂したクフーリン伝説ともグレゴリー夫人の再話したクフーリン伝説とも異なっており、イエイツ独自の幕引きである。ハルの編んだクフーリン伝説では、戦士は、吟遊詩人の要望を拒絶することができないため、敵側の吟遊詩人の求めるままに、槍を次々に差し出さねばならず、自らの槍で命を落とす。グレゴリー夫人の再話では、クフーリンが最初に力を失っていくのは、英雄は身分の低い者の招待を断ってはならず、自らの名をとった猛犬の肉を食したがためであった。

さて『クフーリンの死』では、エマーの舞踏のあと舞台は暗転し、再び明るくなった舞台には、現代のアイランドの辻音楽師たちがおり、歌い手の歌のなかに「老人」が密かに回帰する。『クフーリンの死』では、こうして一見不連続とみえる構造のなかに、生と死と再生のテーマが象徴的に展開されていくのである。辻音楽師の歌自体が、過去に売春婦が乞食に歌い聞かせた歌を現在の辻音楽師が歌うという構造になっており、「再生」のテーマがここでも強調されている。

先にも触れたように、『クフーリンの死』という劇作をイエイツ自身は「能劇」(“a long Noh play”)と呼んでいるが、彼が直接典拠とした日本の能は見当たらない。しかし、キャサリン・レイン (Katherine Raine) が、能の劇的な力は生者の世界と死者の世界とを結びあわせて一つの世界にする力にある、と述べたような意味で、イエイツは『クフーリンの死』という彼独特の「能劇」を作り上げたと言える。それは、深いレベルで能の精神を捉えて構造化していることであり、同時に、死後の世界を信じる「スピリチュアリズム」としてのイエイツの信念の具現化でもあった。こうして能・フォークロア・スピリチュアリズムの世界が融合したイエイツ独特の超自然演劇の形式が生み出されていることを論じた。

また本研究においては、以上のような『クフーリンの死』の劇構造が「サウンド・シンボリズム」の技法によっても支えられていることを明らかにした。イエイツの他の劇作同様、『クフーリンの死』においても /f/ 音と /b/ 音が基本的な対立軸をなしつつも、英雄クフーリンの霊の再生が、/f/ 音を媒介とする /b/ 音への新たな反転によって暗示されていることを指摘した。「盲人」(the Blind Man) と対話するクフーリンの言葉には /f/ 音が優勢になっていく。これはクフーリンが「阿呆」(the Fool) の相に入っていくことを示している。クフーリンは死後に己がとる最初の姿が浮かんでいるのを見るが、それは「柔らかな羽の生えた姿」 (“a soft

feathery shape”)である。「羽の生えた」 (“feathery”) という言葉は/f/音を含むと共に「鳥」 (“bird”) のイメージを想起させるため同時に/b/音の象徴する世界を暗示しているのである。そこに/s/音及び類音の/sh/音が絡み合っており、クフーリンの最後の言葉 (“I say it is about to sing”) に見られるような/s/音の頭韻的な用い方によって、/f/音の世界から/b/音の世界への反転が補強されている点を指摘した。

(2)平成24年度においては、『クフーリンの死』と同様の/f/音、/b/音、/s/音による頭韻的な音の連鎖が、歴史的な転換を幻視するイエイツの詩「再臨」 (“The Second Coming”) にも効果的に用いられていることを学会ワークショップにおいて発表した。この詩の脚韻構造は、秩序の崩壊を暗示するかのよう、弱い「子音」による脚韻から無韻へと展開していくことが批評家により指摘されている。しかし頭韻的な音の連鎖に注目するならば、/f/音から/b/音への反転が詩の展開の主軸をなして世界の転換が予言的に示されており、その劇的プロセスはまた、/s/音の頭韻的な積み掛けによって媒介されていることを明らかにした。

マジョリー・パーロフは、詩の冒頭の二行の‘gyre’ ‘falconer’ は弱い子音による脚韻 (“weak-consonance rhyme”) となっており、次の二行の‘hold’ ‘world’ は子音による脚韻 (“consonance rhyme”) となっているとする。ダニエル・オールブライト (Daniel Albright) は最初の四行は対句 (“couplets”) になりかかっているものの、全体としては無韻詩 (“blank verse”) であり、英語の抒情詩としては通常の形態ではないという。シェーマス・ディーン (Shamus Deane) は、最初の六行はいわば途中で「流産した」ソネットであって、後半部であらためてソネットがまるごと生み落とされているとみる。その点について、ヘレン・ベンドラーは、イエイツの詩があたかも自由意志を持っているかのようであり、前進的な展開に対して「アイルランド的」に抗っていると述べる。

確かに、同じく歴史と文明の転換期を歌う「レダと白鳥」 (“Leda and the Swan”) の厳密なソネット形式も、「神の母」 (“The Mother of God”) の明確な脚韻構造も「再臨」には見当たらない。しかしながら、この詩の頭韻的な音の連鎖に焦点をあてて分析するならば、秩序の崩壊と同時に秩序の転換が劇的に構造化されていることがわかる。「再臨」においては、第一連に現れる‘falcon’が‘falconer’の制御を外れ、物事が悉く「崩れ落ちていく」 (“fall”) 状況が、/f/音の連鎖によって示されている。第二連では、詩人が己の幻視を確信する「確かに」 (“Surely”) という言葉を契機として同一語句、同一文法構造の繰り返しリズムを生みだすなかで、/s/音の連鎖が加速していく (“some”, ‘Second’, ‘sight’, ‘somewhere’, ‘sands’, ‘sun’, ‘slow’, ‘sands’, ‘stony’, ‘sleep’,

‘Slouches’)。この詩の題名中の言葉である‘Second’に内包されていた/s/音を頭韻的に用いる緊迫した聴覚的積み掛けは媒介的な役割を担うのである。そして第一連の「鷹」 (“falcon”) は、砂漠の「鳥たち」 (“birds”) のイメージへと入れ替わり、最終的的局面では、ベツレヘム (“Bethlehem”) に向かって「生まれんとする」 (“to be born”) 存在を示す「野獣」 (“beast”) という/b/音の連鎖への転換により、世界の反転が暗示されることを明らかにした。

(3)平成25年度においては、『鷹の泉』と能「養老」との比較、及び『猫と月』と狂言「不聞座頭」の比較を行うことを通じて、イエイツが、出典とされている日本の能・狂言の構造をむしろ転倒させる形で取り入れている点に特色があることを示した。

イエイツの『鷹の泉』も『猫と月』も聖水をめぐる劇作という意味では共通したテーマを持つ。『鷹の泉』のモデルとされる井戸も実際に存在し、『猫と月』は、イエイツのゴールウェイにある家のバリリー塔から数マイルのところにある聖コールマンの泉にちなむとされる。ナタリー・クローン・シュミット (Natalie Crohn Schmitt) によれば、聖コールマンの泉とされるものは、その近郊には多数存在するということである。

さてイエイツの『鷹の泉』は悲劇として英雄的選択の両義性に焦点が当てられ、開かれた形式となっているのに対して、『猫と月』は笑劇として、二人の対照的な登場人物の選択がそれぞれの幸福の秘跡を授かるとする結末を用意している。この二編のイエイツ劇の終わり方は、イエイツの出典の一つとされる能「養老」が泰平の舞で締めくくられ、一方、狂言「不聞座頭」が二人の登場人物の争いに解決が与えられることなく開かれた形式のまま終わるとまさに逆になっているのである。このことはイエイツが典拠とされる日本の能狂言を独自の形に昇華した査証と言えよう。

さらに聖者が対照的な二者に幸福を授けるという『猫と月』の構造は、この劇作におけるイエイツの「サウンド・シンボリズム」にも反映されていることを明らかにした。すなわち、イエイツの体系において、基本的な対立軸をなす/b/音と/f/音が、魂を象徴する「足の悪い乞食」 (the Lame Man) と肉体を象徴する「目の見えない乞食」 (the Blind Man) の双方に割り振られているという特徴がみられることを示した。そのことにより、対照的であると同時に同類でもある二人の登場人物の類似性が、より強調される効果が生じていると論じた。

たとえば、『猫と月』においては、第一の楽師 (the First Musician) が聖者を兼ねているが、「足の悪い乞食」と聖者の対話では、「祝福された状態」 (“blessed”) が「書物 (聖書に通じる)» (“book”) と結びつけられ、最終

的には四方に「身をかがめる」(‘bow’) 行為により、ゆく道を「祝福」(‘bless’) することになる。一方で「目の見えない乞食」は、「祝福された視力」(‘blessed sight’) を授かるが、聖者を見ることはできず、精神的な意味では依然「盲目」(‘blind’) のままである。しかし対照的とも見える二者はそれぞれに満足なのである。

また /f/ 音に目を向けるなら、「目の見えない乞食」は自らを「大馬鹿者」(‘a great fool’) と認識し、「足の悪い乞食」のことを「ちょいと頭がおかしい」(‘flighty’) と呼んでおり、この劇作では、両者とも「阿呆」(the Fool) 扱いされているのである。二者はいわば同類なのであり、表裏一体の存在なのである。

/b/ 音と /f/ 音の中間領域に現れることの多い音に関しては、/w/ 音の頭韻と /k/ 音の頭韻が、『猫と月』における楽師たちの始まりの歌にすでに現れており、この劇作においては軽妙な調べに乗って、魂と肉体の葛藤のテーマが導入されていることを指摘した。

なお、イエール大学のエズラ・パウンド・アーカイブに保存されている「不聞座頭」の英訳草稿を入手し、イエイツが接しえた「不聞座頭」のテキストを大蔵流や和泉流のテキストと比較検討したところでは、耳の遠い太郎冠者と目の見えぬ座頭菊一がなぶりあう所作や歌の内容に関して、大蔵流に通じる部分と和泉流に通じる部分とがあることがわかった。

フェノロサの遺稿のなかで要約ではなく全訳がなされている狂言は「不聞座頭」一篇である。しかし、イエイツと面識があり、イエイツの演劇観と日本の能の近さを早くから見抜いていたヨネ・ノグチ(野口米次郎)が、狂言の英訳本(*Ten Kiogen in English*, 1907)をイエイツがフェノロサ遺稿について知る数年前に出版している。この英訳本についてイエイツは知り得ていた可能性はあると思われる。実際イエイツはヨネ・ノグチと同じく「狂言」を‘Kyogen’ではなく、‘Kiogen’と綴っている。またノグチの英訳本に収められている「どぶかっちり」(‘The Two Blind Men’)にも座頭菊一が登場しており、「不聞座頭」とあわせてイエイツの典拠の一つであった可能性もあるであろう。

イエイツの『猫と月』において二者のなぶりありが舞踏化され様式化されている点については、西欧の伝統であるパンチとジュディの人形劇と並んで、イエイツが狂言からも学んだ点ではないかと思われる。ただし、先に触れたように、笑劇『猫と月』においてイエイツが与えた調和的な結末は、悲劇『鷹の泉』と背中合わせになっている軽みであると云える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 4 件)

佐藤容子「ワークショップ報告——イエイツの‘The Second Coming’を読み解く」、『イエイツ研究』No.44, 2013, 41-43 (査読有)。

Yoko SATO, “The Symbolic Structure of Yeats’s *The Death of Cuchulain*” *Journal of Irish Studies*, vol. XXVII, 2012, 38-48 (査読有)。

Yoko SATO, Book Review: “Hiroko Ikeda, *Yeats and the World of Irish Folklore* [Yeats no Irish folklore no sekai]. Tokyo: Sairyusha, 2011, 339 pp.”, *Journal of Irish Studies*, vol. XXVII, 2012, 79-80 (査読有)。

Yoko SATO, “The Symbolic Structure of Yeats’s *Purgatory*,” *Journal of Irish Studies*, vol. XXVI, 2011, 76-87 (査読有)。

〔学会発表〕(計 5 件)

佐藤容子【招待講演】「イエイツと日本文化」, アイルランド大使館・シアターX(カイ)主催「イエイツ・デー in Japan 2014 レクチャー・シリーズ」, シアターX (カイ), 墨田区両国, 2014 (平成 26 年 3 月 29 日)

Yoko SATO, “Yeats’s ‘*Kiogen*’: The Symbolic Structure of *The Cat and the Moon*,” Presented in The IASIL Conference 2013: Urban Cultures, Queen’s University, Belfast, July 26, 2013.

佐藤容子【招待講演】「イエイツと日本」, アイルランド大使館主催・早稲田大学国際教養部協力「イエイツ・デー in Japan 2013」, 早稲田大学, 2013 (平成 25 年 6 月 22 日)

佐藤容子「ワークショップ—イエイツの‘The Second Coming’を読み解く」, 日本イエイツ協会第 48 回大会, 佐賀大学, 2012 (平成 24 年 10 月 14 日)

Yoko SATO, “The Symbolic Structure of Yeats’s *The Death of Cuchulain*,” Presented in The IASIL Japan 28th International Conference, Doshisha University, Kyoto, Oct. 7, 2011.

〔その他〕

ホームページ等

Facebook 「イエイツ・デー in Japan」
(講師・講演内用紹介)

<https://www.facebook.com/YeatsDayJapan>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐藤 容子 (SATO, Yoko)

東京農工大学・大学院工学研究院・教授
研究者番号：30162449